

“去 + VP”形式と“VP + 去”形式について —— VP が“去”の目的を表す場合

丸尾 誠

0. はじめに

いわゆる連動文 (VP₁ + VP₂: VP は動詞フレーズ。特に必要のない時には動詞のみから成る場合 (V₁ + V₂) もこれで表す) においては通常行為の継起する順に動詞 (フレーズ) を並べるが、一方の動詞が“去”であり、VP がその目的を表す場合には入れ替えが可能である。

- (1) a. 我去买菜。[私はおかずを買いに行く]
b. 我买菜去。[同上]
c. 我去买菜去。[同上]
- (2) a. 我去找他问问。[私は彼を探しに行って、ちょっと聞いてみる]
b. 我找他去问问。[同上]
c. 我找他问问去。[同上]

丁声树等1961 (113頁) は例 (1a) ~ (1c) の三文について同じ意味を表すとしている。朱德熙1982 (165頁) は (1b) の“去”について轻声で発音されることから“一种虚化了的动词”とし、そのために (1c) のように、前にさらに“去”が現れることもあり得るとしている。(2) は動詞が3つ並んでいるケースである。

本稿では、VP が“去”の目的を表す“去 + VP”形式と“VP + 去”形式の意味的・統語的相違、及びそこから生じる表現的效果について、移動動詞“去”の表す移動段階というものを考慮に入れつつ考察する。

1. “去”とVPの意味関係について

陆俭明1985 (120頁) は“去 + VP”形式と“VP + 去”形式を比較して「“去 + VP”较单一, 只含有一种语义结构关系; “VP + 去”要复杂些, 含有六种不同的语义结构关系」¹⁾としている。前者でいう一義というのが「VP が“去”の目的

を表す」というパターンである。

(1) a. 我去买菜。

ここでは統語的には「行って（それから）買う」という行為の順に動詞が並んでいるものの、“去”と VP の間に“了”を入れて行為を断絶させることができず（*我去了买菜）、また

(1) b. 我买菜去。

と語順を入れ替えても文意に大差はみられないことから、意味的には行為の発生順序ではなく、目的関係に主眼が置かれているといえる。

“去+ VP”形式は「移動+目的的行為」という二段階から構成されており、VP には動作動詞が用いられるが、VP 自体に移動義が含まれるケースもある。例えば“去中国旅行”“去公园散步”における“旅行”“散步”などは動作動詞であるものの、意味的には目的地に到るまでの移動過程をもカバーしている。つまり家を出た時点で既にその行為は始まっているのである。しかし“在中国旅行”“在公园散步”の形が成立することからも、やはり到達点における行為がメインのものとして認識されており、その意味では“去旅行”“去散步”についても行為の継起の順に動詞が並んでおり、目的関係にあるといえよう。また VP に移動動詞“上”（行く）を用いた場合、“上班”“上学”については

- 【条件】 ①：“在”で行為の行われる場所を導入できる（例：在公司上班）
②：場所賓語（以下「L」とする）によって目的地を示せる（例：
去公司上班）
③：時量表現と共に使える（例：上了三天班）

といった条件が成り立つことから、移動義のみならず動作義も有しているといえる。従って、“去上班”“去上学”も目的関係にあるといえる。“上街”については、条件①②は満たさず、③の用法にあたる“上了一会儿街《动词用法词典》”についても規範的とはいえず、*“上了一个小时街”のような明確な時間量との組み合わせになるともはや成立の余地はない。つまり“去上街”という形は成立するものの、ここで感じられる「買い物をする」「街をぶらつく」といった類の動作義（つまり街に着いた後で行う動作）というものは、あくまでも「街へ行く」という行為の背景から連想されうる語用論的な要素に依存したものであり、それ自体ではやはり動作義は希薄となっている。“上”と L が自由な結び

付きになると（例：“上公園”“上北京”など）、上記条件①～③には該当せず、また上述の“上街”のような連想義も有さず、純粹に移動義のみを表す。故に目的関係にはなく、“去+VP”の形は成立しない（例：*去上北京）。

「行く」という行為にはその背景に、何らかの目的が想定可能である。移動と目的の関係については盧濤1995（16頁）の「「去」は何かの目的を達成するための移動であって、目的地だけでなく、目的（行為）と関連するのがその本質的な特徴である」という記述にもみられるように、密接に関わっているといえる²⁾。このことは日本語で「～シニ」とくると主節には「行く・来る」を中心とした移動動詞が続くことから明らかである。

2. “去”とVPの意味上の重点

前述例（1 a）と（1 b）の二文には大きな意味的相違は認められないというものの、形式の違いは意味の違いの反映である。連動文中における前後の動作の意味上の軽重の区別についてはしばしば問題とされるが、語用論的にみた場合の“去+VP”形式と“VP+去”形式の相違については陸俭明1985（126—127頁）に次のような記述がある。

去+VP …… 意在强调施动者从事什么事情，而不在强调施动者位移的运动趋向

VP+去 …… 意在强调施动者的位移，而不在强调位移后所从事的事情³⁾

つまり意味上の重点が置かれているのはそれぞれ後ろの成分であり、こうした区別は筆者が収集した実例においても多くみられた。

(3) 他决定去拉车，就拉车去了。[彼は車を引きに行こうと決意すると、すぐに車を引きに行った]《老舍：骆驼祥子》

(4) 走，咱们还是找巡警去！[行こう、やはり巡査に会いに行こう]《老舍：龙须沟》

(5) ～赶紧走，躲躲去！冯狗子调了人来，还了得！[早く行くんだ、隠れに行くんだ、犬ころの馮が人をよこしたら、大変なことになるぞ]《龙须沟》

(3) では“去”と“拉车”の語順の入れ替えにより、意図された行為（計画）が、その行為を実行するための移動へと移行している様がよみとれる。(4) (5)

についてはその場からの移動を表す“走”と共に、“VP + 去”の形が用いられている。しかし、このような区別を前提としつつも、実際の使用状況においては、以下の例のように、どちらの形でも成立する。

(6) 甲：他在吗？[彼いますか？]

乙₁：不在，他复印去了。[いないよ、コピーしに行った]

乙₂：不在，他去复印了。[同上]

「そこにはいない」ということを強調するという意味で、“VP + 去”形式を用いた乙₁は回答としては適切であるが、ここでは“去 + VP”形式を用いた乙₂の形も成立する。

陸俭明1985の上記のような記述に対して、中川1991(139-140頁)は「何をしに行くの？——旅行に行きます」という言い方が中国語では“你去干什么？——我去旅行”“你干什么去？——我旅行去”のように両方のタイプで成立し、疑問詞に対する答えの部分、つまり前者では後ろに置かれた“旅行”に、後者では前に置かれた“旅行”(本当は“旅行去”全体)に重点があることから、前後どちらに重点があるのかという議論自体を疑問視している。

焦点というのは音声的な強調、情報構造、コンテキストなどに左右されるため、どちらに意味上の重点があるかは一概にはいいきれない。平井・加納1991は機能面における必要度(必須要素・副次的要素)という面から

(7) a. 不上街买菜 [街におかずを買いに行かない]

b. 不坐车上街 [車に乗って街に行かない]

という文において、(7 a)では“上街”“买菜”“上街买菜”のいずれに否定の焦点が置かれるかは文脈によるものであるのに対し、(7 b)のようにV₁が手段・方式を表す場合には文脈の助けなしに、機械的に否定の焦点がV₁に(つまり“坐车”に)定まるとしている。ここでいう(7 a)とは、本稿でいう「移動+目的」にあたるパターンである。

日本語では通常、以下のような表現で、その否定部分を区別することができる。

(8) a. 買いに行かなかった(「買いに行く」全体を否定)

b. 買いに行ったのではない(「買う」を否定 → 見に行ったのだ)

しかし中国語では(8 b)のようにコトガラを否定する“不是”を用いた場合でも、以下のように両タイプで成立するため、その区別は難しくなっている。

(9) a. 我不是去旅行，而是去学习。[私は旅行に行くのではなく、勉強に行

くのだ]

b. 我不是旅行去, 而是学习去。[同上]

3. “去+ VP”形式と“VP+去”形式

ここでは“去+ VP”“VP+去”両形式の統語的特徴について、個別に考察する。

3. 1. “去+ VP”形式

3. 1. 1.

前述の陸俊明1985で扱っているのは“去”が直接 VP に結びついた形 (“去+ VP”) についてである。ここでは移動目的地である場所賓語 L が加わった“去+ L + VP”という形について考えてみる。

(10) a. 去图书馆 借书 [図書館に本を借りに行く]

b. 去上海 出差 [上海に出張に行く]

これは目的地、目的の行為共にそろった形で、どちらに意味上の重点があるかに関しては中立の叙述である。このことは、例えば否定形“我不去南京路买东西。”では、コンテキストにより“去南京路”“买东西”のいずれをも否定することが可能であることから分かる⁴⁾。

“去+ L + VP”形式では行為の順に動詞が並んでおり、目的の行為を遂行するためには、先ず L への到達が前提となる。つまり VP との関連において“去”は到達点指向となるため、移動そのものではなく、到達段階(移動の結果)に重点がある“到”を用いた“到+ L + VP”形式と同義になる。

(10) a' . 到图书馆借书

b' . 到上海出差

また、これらの形は「場所+行為」という構造の点では“在+ L + VP”形式と共通するものである。

(10) a'' . 在图书馆借书

b'' . 在上海出差

(10)、(10)' と (10)'' の違いは移動を前提としているか否かということである。

3. 1. 2.

L が当事者間で明確である場合、または問題となっていない場合⁵⁾には、“去 + φ + VP” という形をとることができる。

(11) a. 去 借书 [本を借りに行く]

b. 去 游泳 [泳ぎに行く]

ここでは L は現れていないものの、L が移動の目的と関連していることは以下のような会話からもみてとれる。

(12) 甲：你去哪儿? [どこ行くの?] ①

乙：我去旅行。[旅行です] ②

甲：去哪儿旅行? [どこに旅行に行くの?] ③

乙：去中国旅行。[中国に旅行に行きます] ④

(12) ①-②では場所を尋ねて、動作動詞で答えている。会話としてはこれだけでも完結しうる。必要があれば、さらに③④と展開していくのである。例えば“他在哪儿?”という問いに対しても、その回答としては“他去复印了。”“他复印去了。”共に可能であるが、ここでは、いずれも「彼がその場にいる」ことを伝えているにすぎない。具体的な居場所については“复印”という行為からの推測となる。

3. 1. 1. でみた“我不去南京路买东西。”という文では“去南京路”“买东西”のいずれも否定の焦点域に入っていたが、L をはずした“我不去买东西。”では“买东西”のみを否定することになる。つまり“去 + φ + VP”形式においては VP に意味上の重点があるといえる。また情報量のバランスという点からみると、L が省略されうるのは L が問題となっていない場合や当事者間で明確となっている（つまり既知の）場合であり、そうした場合、VP は新情報、つまり焦点となる。

もっとも L がない場合には、“去”は「移動実義」ではなく主動詞の前に位置して述語として機能せず、動作者の「意向」を表しているという解釈の余地は常に存在するわけであり⁶⁾、その意味でも“去 + VP”の形では VP に意味上の重点が置かれるといえよう。范晓1998 (75頁)に“你问你妈去。”“我买几个橘子去。”という例について

如果要强调目的, 在表示目的动词短语前还可以加上“来”“去”。例如:

a. 我去买几个橘子去。

b. 你去问你妈去。

(下線は筆者による)

という記述がみられる。これは本稿では扱っていない“去+ VP +去”という形だが、こうした操作により、意味上の重点が VP にあるとされる“去+ VP”という形をつくることになっている。

3. 2. “VP +去”形式

3. 2. 1.

“我买书去。”という形式における“买书”“去”は共に動作者の動作であり、刘月华1980(82-83頁)はこれを“连动句”としている。この種の形式の“去”は軽声で発音されるものの、朱德熙1982(166頁)は“~“去”仍旧保留着表示运动趋向的意义”と述べ、これを“连谓结构”(ただし朱の例は“我买菜去”)としている。

一方、“VP +去”の“去”が述語動詞ではなく、方向補語である(従って“VP +去”は“述补结构”)とされるものについては、通常次のような点がその根拠として挙げられる。

【ケース1】V₁が移動自動詞の場合

例：进教室去、飞去

【ケース2】V₁が他動詞で、“去”が受動者の方向を表す場合

例：寄去了一封信、送一些水果去

3. 2. 1. 1.

「ケース1」については、通常は目的関係を表さない。まずV₁に方向性を含む移動動詞を用いた

(13) 上去 [上っていく]、回去 [帰っていく]、进去 [入っていく]

などについては、“去”は補語とされ、連動文には含まれない。こうしたものは非継起的な主体の移動を表している。次にV₁に方向性を含まない様態移動動詞を用いた

(14) 走去 [歩いて行く]、跑去 [走って行く]

などは移動の手段・方式を表している。従ってこの形式については間に“着zhe”を入れてその意味を明確にした

(15) 走着去 [歩いて行く]、跑着去 [走って行く]

などと同じる面をもつことから連動文の一種とみなされる場合もあるものの、(14) のパターンにおいては“去”が軽声で発音されることから、やはり一般の連動文とは異なる。

この手段・方式を表すパターンについては単独では多義であり、発音の相違が意味の相違に反映される。例えば“骑马去”というフレーズについて朱德熙 1982 (166頁) は“去”が重読されると「馬で行く」という方式を表す意味になり、軽読されると「馬に乗りに行く」という目的を表す意味になることを指摘している⁷⁾。これは“骑马”が動作動詞であるためである。同様に、移動自動詞のうち様態を表すもの、例えば“跑”などについても、その動作動詞としての側面を捉えた場合には「走りに行く」という目的関係を表すことは可能である(以下Ⅱのケース)。以下は李冠华 1991 (14頁) にみられる記述である(体裁は筆者による)。

I. 跑去了 (述补关系) [“去” 读轻声]

孩子扬起双臂, 朝着妈妈飞快地跑去了。

II. 跑去了 (连动关系) [“去” 读轻声] → 去跑去了

天刚亮他就上环城马路跑去了。

III. 跑去了 (连动关系) [“去” 重读] → 跑着去了

上班时间快到了, 自行车又偏偏不在, 他无可奈何, 只好跑去了。

3. 2. 1. 2.

「ケース2」について、動作動詞を用いた場合、“V + 去”形式は多義となる⁸⁾。

- (16) 买去
- a. 買っていく (継起的)

剩下的苹果都被他买去了。[残ったリンゴは全て彼に買っていかれた] 《动词用法词典》
 - b. 買いに行く (目的)

甲：没有酱油怎么办？[酱油がないよ、どうするの？]
乙：让他买去吧。[彼に買いに行かせよう] (→让他去买吧。)

(16 a) は受動者の移動を伴った継起的な行為を表す動補構造である。b は「～シニイク」という目的関係にある連動構造である。

連動文「V₁ + V₂」形式中の V₂ の統語的制約として、V₁ が単独の動詞である場合には V₂ は単独では用いられないということが挙げられるが、このことは“去”については適用されない⁹⁾。

(17) 我拿去。〔連動文として〕私₁が取りに行く]

しかし、“去 V”形式と比べると“V 去”形式の成立の自由度は下がる。

(18) a. 你去看吧。〔君、見に行くってよ〕～ *你看去吧。

b. 我去找。〔私が探しに行く〕～ *我找去。

これはそもそも V₁ 自体についてみた場合、単独で用いられるのが主として“来、去”及びその複合動詞類（例：回去、上去……）のような移動自動詞であるためである。例 (18) については、賓語を付加すると成立するようになる。

(18) a' . 你看他去吧。

b' . 我找他去。

3. 2. 2.

“VP + 去”形式において VP が“去”の手段・方式を表す場合、“骑马去香山”“走着去火车站”などのように L をとれることから、“去”は実質的な意味をもっているといえる。目的関係を表す場合、“去 + VP”形式における“去”は L をとることができるが、“VP + 去”における“去”については、軽声で発音されるという音声面だけでなく、L をとることができない¹⁰⁾ という形式の面からも、虚化しているといえる。

(19) a. 去旅行〔旅行に行く〕～ 旅行去〔旅行に行く〕

b. 去中国旅行〔中国に旅行に行く〕～ *旅行去中国

L が意識されつつ背景化された“去 + φ + VP”形式においては、目的の行為遂行の前段階として、“去”は到達段階を表している。一方、“VP + 去”形式における“去”は動作動詞に方向を付与するものであり、その場合の“去”は、往々にしてその場から離れること、つまり出発段階を表しており、L を意識したものではない¹¹⁾。

さらに「VP + 複合方向動詞」という形式になると、L がなくても、その形式それ自体が成立しなくなる。

(20) a. 去看看〔ちょっと見に行く〕～ 看看去〔ちょっと見に行く〕

b. 进去看看〔ちょっと見に入っていく〕～ *看看进去

“看看上去”“看看出去”などについても同様である。これは“去”が話者と

の関係を表しているのに対し、“上、下、進、出……”などの移動動詞は、ある基準点（場所）との位置関係を表し、客観的にその方向が定められるが故に、それらを用いた場合には L が明確に読み取れるためだともいえよう。つまり“VP + 去”形式で表される移動は L を意識したものではないといえる。

もっとも、“VP + 去”形式における L については、動詞の前で提示して、状況的に機能させることは可能である。

(21) “带我出去玩玩?上白云观?不,晚点了;街上溜溜去?” [遊びに連れて行ってよ。白雲觀は?いや、ちょっと遅いね。街をぶらぶらしに行こうよ]《駱駝祥子》

(22) 先生,你喝够了茶,该外边活动活动去! [先生、お茶をたっぷり飲んだから、外へ体を動かさに行かなくちゃ]《老舍：茶馆》

(23) 屋里烤烤去! [部屋の中に暖を取りに行きなさいよ]《龙须沟》

(24) 丁四,你找个地方睡会儿去! [丁四、どこか場所を探してしばらく寝てきなさい]《龙须沟》

この場合には“去”は着点指向にシフトしているものの、ここで用いられる L は、“去 + L + VP”形式の場合にみられるような自由な結び付きではない。

4. 移動目的の達成について

4. 1.

ここでは行為が既に完了している場合における、移動目的の達成の有無という問題について考えてみる。

(25) a. 去看电影了吗? [映画を見に行きましたか?]

b. 看电影去了吗? [同上]

こうした問いに対しては、いずれにも「見た」「見ていない」は“去了。/没去。”で代用することができる。後者“没去。”は“看”の前段階である“去”自体が実現していないことから、目的行為の未達成は明らかであり、前者“去了。”については語用論的には、通常それだけでも、目的行為の達成は含意可能である。日本語においては

(26) a. 買いに行った【実際買ったかどうか不明】

b. 行って買った【実際に買った】

通常 (26 a) のような表現が用いられるが、特に結果を強調したい場合には、(

26 b) のような語順をとるという手段がある。(26 b) では2つの動詞が並列的に用いられている。中国語では目的関係を表す場合、“去+ VP” “VP +去” のいずれの語順であってもこの差異は表れない。

- (27) a. 我去买书了,可是没买到。[本を買いに行ったが、買えなかった]
b. 我买书去了,可是没买到。[同上]
- (28) a. 我去看他了,可是没见到。[彼に会いに行ったが、会えなかった]
b. 我看他去了,可是没见到。[同上]

中国語では、動詞自体はその行為の意図の実現を必ずしも含意するものではないことはしばしば指摘される。

- (29) a. 我记了,可是没记住。[?覚えたが、覚えられなかった]
b. 买了两个小时,没买到。[?2時間買ったが、買えなかった]

つまり中国語では「行為」と「結果」を別個の段階として示すことが可能であり、そのために結果補語が発達しているという事象にもつながっていくのである。ここでいう結果の含意については語彙的な問題であるが、“去+ VP” 及び“VP +去” 形式における移動目的の達成に関しては、動詞“去”の有する語用論的な要因が関連している。“去”は「出発 — 到達」という移動の全過程をカバーできるため

- (30) 他去中国了。[彼は中国に行った]

という文では

- (31) a. 彼が発話場所にいない(出発)【着いたかどうかは不明】
b. 彼が中国に着いた(到達)

という両義を表しうる。つまり“去+ VP +了” “VP +去+了” 自体では、目的の行為遂行の前提となる L への実際の到達をも必ずしも保証するものではないのである。

既述のように日本語の場合、結果の含意については以下のような表現で区別することができた。

- (32) a. 私は図書館に本を借りに行った。【借りたかどうか不明】
b. 私は図書館に行って本を借りた。【借りた】

中国語では“了”の位置を変えることにより(その結果「了₂」(語気助詞)が「了₁」(アスペクト助詞)となる)、結果の含意は可能となる。

- (33) a. 我去图书馆借书了₂。【借りたかどうか不明】
b. 我去图书馆借了₁书。【借りた】

このことは先の例 (27a) を次のようにすると成立しなくなることからも分かる。

(27) a' . *我去买了书, 可是没买到。

また、(33 b) には数量詞を加えられるが、(33a) には加えられない。

(33) a' . *我去图书馆借一本书了₂。

b' . 我去图书馆借了₁一本书。

(33b') では目的の行為が実現しているために、より具体的に賓語についても言及できるためであろう。

次に L との関係という点から考えてみると、“了₂” を用いた

(34) 我去买书了。[私は本を買いに行った]

は成立するが、“了₁” を用いた

(35) ? 我去买了书。

になると、フリーコンテキストの単独の文としては (34) よりも文のすわりが悪くなる。ここでは L が必要となってくる。

(36) 我去书店买了(那些)书。[私は本屋に行って(それらの)本を買った]
例 (33) でみたように (34) と (35) の違いは前者が「本を買ったかどうかは不明」であるのに対し、後者では「買った」という行為の実現が含意されている点にあった(その意味で、例 (36) では賓語についてより具体的に言及するためにも、“那些” などがあつた方がいいとするインフォーマントもいる)。(35) では「本を買う」という行為が実現している以上、その前段階である L への到達は当然ながら保証されている。つまり着点義が明確になったことにより、継起する2つの行為が個別的に際立ち、L についても言及する必要性が生じてくるのである。語彙的に到達段階に重点のある“到”を用いた場合には、そのことがさらに明確であり、フレーズのレベルであっても、L の出現は必須となっている。

(37) *到借书 → 到图书馆借书 [図書館に本を借りに行く]

また、例文 (35) の容認度が低い根拠を文が完結しない(言い切りの形にならない) からという点に求めると、次のような動詞が羅列され対比的に用いられる場合には成立する。

(38) 我去买了东西, 然后又去看了电影。[私は買い物に行って、それからまた映画を見に行った]

ここではもはや L は問題となっておらず、“去+ VP” 形式中の VP に意味上の重点が置かれているといえよう。

4. 2.

結果の含意については、“去+ VP”形式の場合、目的の行為を表す VP 中の V_2 に“了”を付加することによって表すことができた(例(33b))。一方、“VP+去”形式の場合には、目的の行為を表す VP 中の V_1 に“了”を付加すると目的関係ではなくなってしまう。

(39) 我买水果去了。[私は果物を買って行った]

→ 我买了水果去。[私は果物を買ってから行く【継起的】]

“买去了”において、目的の達成が不明なのは移動自体に重点があるからだともいえるが、さらに特に動作者が三人称である場合など、行ってしまった後の事情を確認できないということが挙げられる。一、二人称である場合に「～しに行った」という言い方で目的の行為の達成まで含意できるのは、発話時にはその場所に戻ってきているという語用論的な状況からの解釈による。“去了”という形自体では出発、到達に加えて「行って戻ってきた」という往復運動における帰着を表すことも可能であるものの(例：他去了中国。[彼は中国に行った／行ってきた])、それを語彙的に明確にしたのが継起的行為を表す“买来”[買ってきた]であり、その場合には結果まで含意される。

5. まとめ

以上みたように、“去+ VP”及び“VP+去”両形式の有する表現的相違には、“去”がどの移動段階を表しているかということが関わっており、その段階は到達点である L の存在や“了”の位置といった要素に影響されるといえる。

〈注釈〉

- 1) “VP+去”形式内部における意味関係について、陆俭明1985(117-120頁)は「“去”は受動者の移動方向」(例：寄点儿钱去)、「VPは“去”の方式」(例：乘飞机去)……(中略)「VPは“去”の目的」(例：我买菜去)など6つに分類している。
- 2) 「{塾/教習所/専門学校}に行く」という表現においては、目的地により、その目的が明確となっている。

3) しかしそのように述べる一方で、陸自身同論文中(128頁)には

(1) 爸, 我不想在公司里干事了, 我想上学去, 您同意吗?

(中略)

很清楚, 例(1)里的“上学去”重在表示要从事学习的意思, 相当于“要上学”

という記述がみられる。ここでは“VP+去”におけるVPに重点があるとしているのである。この点についての指摘は盧濤1995(19頁)にもみられる。

4) 叶盼云・吴中伟1999(221頁)に次のような例文が挙げられている(下線は筆者による)。

我不去南京路买东西, 我去北京路买东西。

我不去南京路买东西, 我去南京路看电影。

5) 「今週の日曜日{映画見に/スキーしに}行こう」という表現においては、その行為に重点があり、場所は問題となっていない。

6) 例(1a)でいうと「私はおかずを買うとしよう」とも訳せる。

7) 王还1994(68-69頁)にも同様のことが述べられている。

8) “V去”形式の構造について、陆俭明1989(148頁)は“述宾结构”(例: 想去)、“述补结构”(例: 送去)、“连动结构”(例: 参观去)の3つに分けている。

9) 陆俭明1989(149頁)ほか参照。

10) “出差去上海”[出張で上海に行く]のように“VP+去+L”という形が成立するものもあるが、この場合「出張のために」という「原因・理由」の意味役割を果たしている点で、“去上海出差”[上海に出張に行く]のような目的関係を表しているものとは異なる。こうしたものには“比赛去北京”“插队去农村”“谈判去东京”などがある。張・佐藤1999(49頁)に、強調のために語順を変えた特殊例として“他买东西去商店。”(“去”は去声(qù): 筆者注)という例が挙げられているが、この場合にも“他买东西去商店, 从来不去自由市场。”のような文脈の支えが必要であり、単独の文としてはやはり不適切である。

11) その場から離れていくことを表す“走”を用いた“买走”“借走”になると、目的関係ではなく、「買っていく」「借りていく」という継起的な行為を表すことになる。荒川1994(80頁)参照。

〈 主要参考文献 〉

- 荒川清秀1988. 「“到”は介詞か」, 『外語研紀要 第12号』愛知大学外国語研究室, 1-13頁。
- 荒川清秀 1994. 「買ッテクルと“买来”」, 『外語研紀要 第18号』愛知大学外国語研究室, 71-81頁。
- 平井勝利・加納光1991. 「中国語の所謂連動式表現と否定の焦点」, 『言語文化論集 第XIII巻第1号』名古屋大学言語文化部, 245-258頁。
- 菱沼透1993. 「“来”“去”と“到”」, 『明治大学教養論集 通巻255号 外国語・外国文学』, 1-13頁。
- 盧濤1995. 「文末の“去”の機能について」, 『中国語学』第242号, 12-21頁。
- 盧濤2000. 『中国語における「空間動詞」の文法化研究』白帝社, 149-174頁。
- 森田良行1968. 「「行く・来る」の用法」, 『国語学75』国語学会, 75-87頁。
- 中川正之1991. 「“去旅行”と“旅行去”と“去旅行去”」, 『中国語学習 Q & A 101』大修館書店, 138-141頁。
- 成田徹男1981. 「空間的移動を意味する「～てくる・～ていく」」, 『人文学報』第146号, 東京都立大学人文学部, 1-20頁。
- 小川郁夫1987. 「目的関係を表わす〔“来”+〕vp + “来”」, 『名古屋大学人文科学研究 第16号』, 71-83頁。
- 張黎・佐藤晴彦1999. 『中国語表現文法 —— 28のポイント』東方書店, 46-52頁。
- 丁声树等1961. 『现代汉语语法讲话』商务印书馆(1979)。
- 范晓主编1998. 『汉语的句子类型』书海出版社, 68-78頁。
- 李冠华1991. 「“V 去了”说略」, 『汉语学习』第3期, 10-14頁。
- 刘月华1980. 「关于趋向补语“来”、“去”的几个问题」, 『语言教学与研究』第3期(载《汉语语法论集》1989, 现代出版社, 77-85頁)。
- 刘月华主编1998. 『趋向补语通释』北京语言文化大学出版社。
- 陆俭明1985. 「关于“去+VP”和“VP+去”句式」, 『语言教学与研究』第4期(载《陆俭明自选集》1993, 河南教育出版社, 115-132頁)。
- 陆俭明1989. 「“V 来了”试析」, 『中国语文』第3期(载《陆俭明自选集》1993, 河南教育出版社, 133-150頁)。
- 吕冀平1987. 「复杂谓语句」, 『汉语知识讲话(合订本)4』上海教育出版社(1991)。
- 孟琮等编1987. 『动词用法词典』上海辞书出版社。

王还1994. 「“到南方去旅行”和“到南方旅行去”」, 『门外偶得集(增订本)』
北京语言学院出版社, 63—69页。

吴启主1990. 『教学语法丛书之十四 连动句·兼语句』人民教育出版社, 4—65
页。

辛承姬1998. 「连动结构中的“来”」, 『语言研究』第2期, 53—58页。

叶盼云·吴中伟1999. 『外国人学汉语难点释疑』北京语言文化大学出版社。

朱德熙1982. 『语法讲义』商务印书馆(1997)。

[付記]

本稿作成にあたり、インフォーマントとして趙旭先生(名古屋大学外国人教師)、張勤先生(中京大学)ほかたくさんの方々の協力を得た。ここに記して深謝の意を表したい。なお内容については、当然のことながら、筆者が全面的に責任を負うものである。